

20221018

先週末（10月15-16日）、ロシア史研究会大会が法政大学とオンラインのハイブリッド方式で行なわれた。私は当初、初日はオンライン、2日目は法政大学の対面で参加するつもりだったが、体調を多少崩して外出を控えた方がよさそうな状態になったため、2日目もオンライン参加にした。久しぶりに大勢の人たちと直接顔を合わせて、セッションの前後を含めてお喋りする機会を得たいと期待していたのだが、そうならなかったのが残念だ。オンライン参加でもそれなりの収穫はあったが、自宅にいてもどうしても気が緩んでしまって、本来聞くべき議論を聞き損ねたりもした。そういう問題はあったが、全体として充実した大会だった。

1日目の午前中は所用でパスして、午後の共通論題A「ロシアとウクライナ」から参加した。

三浦清美「中世ロシアにおける全ルーシ府主教座の動きから見るキエフとモスクワ」。

福嶋千穂「ポーランド国家とルーシ（ルテニア）地域」。

村田優樹「ロシア帝国の崩壊と「ウクライナ」の制度化」。

コメンテーターは吉田俊則、梶さやかの両氏。

第1報告の三浦氏とコメンテーターの吉田氏との間で教会史をめぐる論争めいたやりとりがあったが、一つには私が教会史研究に通じていないこと、もう一つには、オンラインのマイクに不調があったらしく、吉田氏のコメントがほとんど全く聞き取れなかったという事情のため、この応酬の内容を把握することができなかった。福嶋報告と村田報告および梶氏のコメントはどれも大変興味深いものだったが、私個人にとっては特に村田報告が参考になった。村田氏はロシア中央 vs ウクライナという二項対置図式を突き崩して、ウクライナにおける複数のアクターの相互関係に着目していたが、この観点はペレストロイカ期にも相通じるものがある。また、1917年に誕生したウクライナ人民共和国はそれまでの諸県への区分を超えてウクライナという領土的単位をはじめて創出したとの指摘もあり、これもソ連時代に引き継がれたものなので、重要な指摘だと感じた。

2日目の午前中は共通論題B「戦争の時代の再来と歴史像の再構築」。第一部と第二部に分かれ、第一部は「ソ連史・帝国史の脱「正常化」」（英語セッション）。

Ilya Gerasimov, Why Is It Time for a New Soviet History.

コメンテーターは宇山智彦氏。

グラシモフ報告のペーパーを事前に読んだところ、ソヴェト史の見直しに関する興味深い問題提起だったが、比較的簡略で、やや羅列的な印象があった。当日はやや遅い時間にオンライン接続したため、討論をあまり聞くことができなかったのが残念だ。セッションのタイトルに「正常化」という語があることの意味について池田嘉郎氏と企画者の宇山氏の間でやりとりがあったが、「正常化／脱正常化」の語で何を意味するのかは、今後も引き続き論じられるべき問題だろう。

第二部は「ロシア現代史の模索」。

池田嘉郎「現代ロシアにおける主権と議会」。

立石洋子「ソ連解体後の自国史像」。

コメンテーターは油本真理氏。

2つの報告は対照的な性格を持ちつつ、どちらも興味深いものだった。池田報告はロシア

の長い歴史の中で、サマデルジャーヴィエ（通常「専制」と訳されるが、それだけには尽きない）およびスヴェレニテート（主権）概念がどのように使われてきたかを跡づけるもの。壮大で野心的な問題提起だが、それだけに、多数の参加者たちから種々の疑問が提起された。私自身は、「主権民主主義」という概念の解釈およびそれと関連してスルコフの位置づけが正確でないのではないか（これは池田氏に限らず、この問題に触れる多数の人たちに共通の問題）、また議会の重要性を説きながらそれを「統一ロシア」とほぼ等置していて、共産党や「公正ロシア」の役割を等閑視するかに見える点に疑問を覚え、その2点について質問した。池田氏のリプライは、（私だけでなく多くの人に対して）それらの問題は別個に論じるべきものなので、今回は敢えて言及しなかったという形での応答だった。一人の人間が一つの報告や論文で何もかもを論じることができないのは当たり前であり、あれこれの論点を省くというのは自然なことである。ただ、池田報告は対象を特定の狭い主題に絞るという通常の個別研究ではなく、むしろ非常に長い歴史をとりあげてその全体像を論じるかの形をとっている。その「全体像」はもちろんありとあらゆる事象を包括するものではなく、論者が重視する特定の角度から見た「全体像」という限定を持っている。これは池田氏の仕事のユニークなスタイルということかもしれない。その角度から見ての切れ味の良さは十分に認めるとして、私だけでなく多くの発言者たちの出した疑問を取り込むと、かなり異なった「全体像」が浮かぶ余地がある。それはそれでよいのかもしれない。とにかく野心的な報告であることは間違いない。

これと対照的に立石報告はテーマを絞った手堅い研究であり、また政治家たちの議論よりもむしろ社会の動向に照準をあわせた点にユニークさがあった。こういう議論に対しては、「政権による歴史の利用」論をどう見るかという疑問が当然に提起される（実際、当日の討論では、その角度からの質問がいくつか出された）。そうした疑問に対して立石氏は、政権の側も、あまり社会の反発を受けないよう、ある程度社会の状況を見ていること、独ソ戦の思い出は各個人のなかにあり、政権はそうした現にある記憶を利用するという関係だという形で回答した。これに対してもなお疑問を出す余地はあるだろうが、普段あまり注目されない側面を掘り起こす意味で、有意義な視角だと感じた。

午後の第1セッションは自由論題で、二つの分科会のうち、上垣彰「「レンド・リース」とソ連戦時経済」に出た。事前にペーパーに目を通したところ、細部は十分咀嚼できないながらも、綿密な統計的研究で感心した。これに対してコメンテーターの富田武氏がどのように切り込むかを聞くつもりだったのだが、自宅で気が緩んで、遅めにオンラインにアクセスしたら、もう富田氏のコメントが終わった後だった。総合討論ではペーパーの趣旨から離れた多様な意見が交わされ、関心の高さが窺われた。

最後は、パネル「帝政末期の境界地域における帝国と大衆」。

高尾千津子「帝政末期ユダヤ人とロシアのアンビヴァレントな関係」

松里公孝「帝政末期右岸ウクライナの正教司祭とロシア人民同盟」。

青島陽子「帝政末期における境界地域の再接合」。

コメンテーターは長縄宣博氏。

帝政期を主要研究対象としていない私にとって、直接には知らない事柄が多かったが、どれも素人の意表を突く側面をとりあげて、ロシア帝国の複雑な諸相を浮き立たせる報告で、大いに勉強になった。個人的には、青島報告で取り上げられた教育と言語の関係に特に関

心を引かれた。「西部 9 県」「ポーランド王国諸県」「沿バルト諸県」という三つの地域に即した報告だが、より細かく分けた地域ごとに住民の民族的・言語的・宗教的構成が異なり、政策選択の前提条件も異なる以上、それらを何らかの形で整序していくための工夫がほしいという無い物ねだりをしたくなってしまった。冒頭と末尾に「非ロシア人」という言葉が出てきたが、一口に「非ロシア人」といっても、ポーランド人、バルト・ドイツ人、エストニア人、ラトヴィア人、ユダヤ人などはそれぞれに大きく異なった特徴を持っているのだから、「非ロシア人」という言葉が無造作に使うことには疑問がある。もう一つの無い物ねだりとして、宗教のことも気になった。もちろん、言語の問題と宗教の問題は単純に重なるものではないが、全く無縁というわけでもないで、その点にも触れるともっと膨らみが出たのではないかという気がした。たとえば、現在のエストニアに当たる地域では、ドイツ語とルター派がバルト・ドイツ人の文化的ヘゲモニーを意味していたわけで、それに対抗する形で正教会が進出した面があるのではないだろうか。

全体として今年の大会は、時節柄、当然のこととして、ウクライナとロシアの関係にかかわる議論が大きな位置を占めた（正面からそれを掲げたのは共通論題 A だが、それ以外のセッションでも大なり小なりウクライナ＝ロシア関係が影を落としていた）。歴史家の会合である以上、直接的な意味での時局的解説や評論に走るのではなく、地に足のついた歴史論がメインだったのは当然だが、それでも、戦争が歴史への見方に大なり小なり影を落としていることが感じられた。その際、基本的な問題意識として、「戦争という現実を前にして、これまでの歴史への見方に欠落があったことを意識して、それを反省する」という方向のものと、「戦争の中で歴史が政治の手段として利用されている現実を見据え、それから距離をおこうと努める」という方向とがあるように思われた。これはどちらが正しいという問題ではなく、歴史家（のみならず、あらゆる人々）が問われている問題だろう。

#### 20221104

SNS でたまたま目にとまった表現だが、No Lives Matter という言い方があるとのこと。もちろん、Black Lives Matter をもじったもので、あからさまに非人道的な言葉だが、戦争の現実はそのようなことを意味しているのだということに突きつけていて、残酷なリアリティがある。

#### 20221108

先週末（11 月 5-6 日）、ロシア東欧学会の大会が新潟大学およびオンラインのハイブリッド方式で開かれた。私は両日ともオンラインで参加した。

1 日目の午前中は自由論題で、2 つの分科会のうち政治の部会に出た（なお、このセッションではオンライン用のマイク設定に問題があったらしく、対面参加者たちの発言が聞き取りにくかった。これ以降のセッションでは、この問題は解消されたが、ハイブリッド方式の運営の難しさを改めて感じた）。この部会での報告は次の 2 つ。

鳥飼将雅「ウクライナの支配政党の地方議会における候補者リクルートメント」。

保坂三四郎「：われわれはウクライナについて何を語ったか？」。

鳥飼報告は地方議会選挙に注目して、そのときどきの「支配政党」（2010 年選挙のときには地域党、2015 年の選挙のときにはポロシェンコ・ブロック、2020 年選挙のときには公

僕党)の強弱、体質、他政党との関係などを論じた。ウクライナにおける地方政治の重要性は以前から指摘されていることだが、それを議会選挙と政党のあり方という論点に即して具体化したことには積極的な意義があると感じた。ゼレンスキー党たる公僕党が2019年の大勝とは対照的に2020年の地方選挙では振るわなかったということはダニエリの最近の論文(Europe-Asia Studies, vol. 74, no. 7)でも指摘されていたが、鳥飼報告はゼレンスキーの政治的アマチュア主義および多くの地方政党台頭との関係で説明している点が興味深かった。当日の口頭報告では時間の関係で省かれたが、ペーパーの末尾の問題提起(多くの政党が非合法化されているのは戦争という緊急事態の中では正当化されるけれども、安全保障上のリスクと自由民主主義的な原則の順守の両立というディレンマも無視できない)も重要な指摘だろう。

保坂報告は2014 - 2019年における日本のウクライナ関連発言を数量的手法でコンテンツ・アナリシスの対象としたもの。こういう手法はロシア・東欧研究ではわりと珍しいもので、それなりの意義は確かにあるのだろう。ただ、素材とされている個々の言説をコーディングするに際して、「こういう言葉を使うのはこのような見方を前提しているのだ」という解釈が暗に前提されているように感じられ、その解釈自体をもっと自覚的に論じないと、薄弱な基礎の上に論を構築することになるのではないかという疑問を覚えた。

午後は共通論題「ロシア＝ウクライナ関係と世界」(その1)で、3つの報告があった。

松里公孝「ロシアの戦争目的：政権打倒、征服、そして領土整理」。

服部倫卓「ロシアとウクライナの10年間貿易戦争」。

浜由樹子「ウクライナ侵攻のイデオロギーとその背景」。

松里報告は例によって切れ味のよい大胆な問題提起。多数の現地調査やインタビューに基づいた豊富な状況提供(開戦後は現地に行くことができなくなったが、多数の知人たちとオンラインや電話で連絡を取っているらしい)があり、また軍事面に関するリアルな解説もあって、学ぶところが多かった。ことの性質上、疑問を呼ぶ個所もあちこちにあり、当日も多数の質問を浴びせかけられていたが、そのこと自体、重要問題に真っ向勝負で挑んだことの反映だろう。

服部報告は、その前半部では、この「貿易戦争」は通常の貿易戦争と違って、経済的というよりもむしろ政治的性格が濃いということが指摘され、これはあまり驚かなかったが、後半に意表を突く指摘があった。それによれば、ウクライナのロシアからの天然ガス輸入は2015年に停止されたが、実は、欧州からパイプラインを逆流させる「リバース輸入」(中身はロシア産のガス)があるのだという。ドンバス封鎖(ウクライナ右派による封鎖をキエフ政府が追認した)はかえって石炭に関してロシア依存を強めたことも指摘された。他面、ロシアの方も軍需物資供給の多くをウクライナに依存しており、輸入代替の宣伝にもかかわらず、実はウクライナから第3国経由で購入を続けていたのだという。してみると、両国の経済関係は「マイダン革命」を境にほぼ全面的に断絶したかの外観を呈しつつも、実はその裏で密接なつながりをギリギリまで保っていたということになるのだろう。

浜報告は現代ロシアのイデオロギー状況の多面性を手際よくまとめていた。ロシアのイデオログたちの「西側」(この概念は「ヨーロッパ」とは異なる)批判の諸相については既に広く紹介されているが、そこには、本来相容れない雑多な要素が並存しているにもかかわらず、それらの相互関係が立ち入って検討されることはこれまであまりなかった。実

はそれらは一体をなしているわけではなく、異なる諸潮流が合流したに過ぎないこと、彼らを結びつけているのは「西側」の「リベラルな価値」による世界制覇への反撥だというのは重要な論点だろう（これはラリュエルも指摘している通り）。多面的な要素の一つとして、通常あまり重視されていない「宗教とジェンダー」の問題が挙げられ、反 LGBTQ 宣伝が「伝統的価値」の擁護という形をとって提出されているという指摘も面白かった。これはロシアに限られた現象ではなく、アメリカの宗教右派とか日本では統一教会や日本会議にも見られる特徴であり、これも更に論じるに値する点だろう。

2 日目の午前中は共通論題の続きで、3 つの報告があった。

岡部芳彦「イギリスの産業革命とロシア帝国」。

越野剛「ロシア語文学におけるウクライナと戦争」。

安達大輔「ロシアのウクライナ侵攻後のメロドラマ」。

岡部報告の主題は私にとっては縁遠く、報告自体はやや咀嚼しにくかったが、上垣彰氏が明快なコメントをつけてくれたおかげで、問題の所在がつかめるようになった。自由討論の中で岩田昌征氏が、18 世紀半ばのルガンスクにはイギリス人たちよりも早くセルビア人たちがやってきていたと指摘していたのには驚いた。

越野報告は私の専門から遠いにもかかわらず、非常に面白い報告だった。ゴルバトフ（ドンバスのユダヤ人作家）とアダモヴィチ（ベラルーシ出身の有名な作家）という二人の文学者（どちらもロシア語で書いている）を取り上げて、そこにおける「民族」観（ロシア人・ウクライナ人・ベラルーシ人の相互表象）、「敵・味方」観（どこに線を引くか）、「加害者／被害者」観などを論じた報告で、文学がいかにかくさんの論点を提示するものなのかを思い知らされた。ドイツの捕虜となった人（民族的にはウクライナ人）がコラボレーターとなった例をアダモヴィチが描いているのはウクライナ人＝ファシストとするイメージを拡散する一方、「敵」に具体的な生きた顔を与えたという指摘は痛切な意味を持っている（なお、このアダモヴィチはアレクシエーヴィチの文学的先行者として知られる）。

安達報告は「メロドラマ的想像力」をキーワードとしていたが、最初のうちこれが何を指すのかよく分からず、多少戸惑った。話を聞くと、メロドラマ的想像力は二項対立図式を強化する役割を持ち、ハッピーエンドによってトラウマ的経験を克服するというものようだった。今日の状況でウクライナ側の映像や演説がそうした特徴を顕著に帯びているというのは分かりやすい。他面、プーチンの演説も「西側の犠牲となってきたロシア」というイメージをふんだんに盛り込んでいるが、これは苦しみに関する視覚的表現に欠けるといえる。これは面白い指摘だが、それがいったい何を物語るのか考え込まされた。道徳に関するシニシズムとか、ある見解の表明とそのパロディの区別がつかないといった状況も指摘され、これはこれで興味深い論点だが、これはロシアに限らず、ポストモダン的な精神状況の特徴ではないかという気もする。

午後は自由論題で、政治・国際関係部会に出た。報告の順序が当初プログラムとは逆の順になった。

堀田主「EC・コメコン共同宣言をめぐるソ連の対ヨーロッパ政策」。

荻野晃「オルバーン政権とウクライナ情勢」。

堀田報告は主としてイギリスの公文書館およびEUの公文書館資料に基づいて、1985-88 年におけるECとコメコンの接近過程を跡づけたもの。本来なら藤澤潤氏がコメンテータ

一となるにふさわしい報告だが、諸般の事情で同氏がコメンテーターになることができないとのことで、私がピンチヒッターになった。あまり内在的な批評をすることはできなかったが、報告で対象とされた 1985-88 年とその後の時期の関係をどう捉えるか、「西ベルリンをめぐる領土条項」という表現はベルリンの地位に関する基本問題とどう関わるのか、コメコン諸国のあいだの分岐をどう捉えるか、西欧諸国間の分岐とりわけ西ドイツの位置をどう捉えるか、ヨーロッパと区別されるアメリカの位置づけをどう考えるかといった問題を提起してみた（時間配分がうまくいかず、後半はものすごく駆け足になってしまった）。報告者はまだ博士課程に進学してまもないとのことで、若くして原資料に基づく研究を始めているのは大いに頼もしいことなので、今回の報告が将来大成するためのステップとなればよいがと念じる。

荻野報告はコロナ禍以降のハンガリー・オルバーン政権の軌跡を踏まえつつ、EU とロシアの双方をにらむ「シーソー政策」、ウクライナ戦争にあまり巻き込まれまいとする姿勢（政権だけでなく世論も）などの論点を提示し、ハンガリー情勢に疎い者にとっては学ぶところが多かった。

全体として、この大会では、ウクライナ戦争という主題が非常に大きな位置を占めていた。3 週間前のロシア史研究会大会では、歴史家の会合である以上、現状を頭に置きつつも直接はあまり踏み込まないといった感じの議論が多かったのに対し、こちらの学会ではストレートに現在の戦争に触れる話が多かった。私自身は大分以前に現状分析から手を引き、「歴史としての現代史」に特化してきたが、それでも最近の情勢に無関心ではできず、不十分ながら、近現代史的文脈と現状の接点という角度からあれこれ考えてきた。たまたま『(山川セレクトション) ロシア史』という本で「21 世紀のロシア連邦」「ロシア周辺諸国の動向」という二つの章を担当することになったので、戦争に至る時期のロシア・ウクライナその他諸国の動向の概観を書いた（既に再校済みで、来年 2 月ごろ刊行予定）。また「2014 年と 2022 年」（『ユーラシア研究』67 号、2022 年 12 月刊行予定）という論文では、開戦の背景について、おっかなびっくり一つの仮説を立ててみた。11 月 16 日には兵庫県弁護士会主催のウェビナーで「ウクライナ戦争の背景」という話をする予定になっており、それ以外にもいくつかの寄稿や発言の予定がある。それらを準備する中で考えたことと、今回の大会で聞いた様々な議論とは、あちこちで触れあいながら、共感したり疑問を覚えたりするもので、頭の中がワンワンというような感じになった。よいブレーン・ストーミングの機会だった。企画責任者の大役を務めた大串敦氏の労を多としたい。

20221201

ウクライナ戦争と非ロシア諸民族。

ウクライナ戦争で戦死したロシア軍兵士たちの間で非ロシア諸民族の比率が異様に高いのではないかとよく指摘されている。大まかにはその通りなのだろうし、厳密な統計分析は望べくもないが、この問題はもう少し立ち入って考える余地があると指摘した論文に接した。

渡辺日日「遠い友への書簡——ウクライナ情勢・シベリア民族学・言語と民族と地理の問い」（『ことばと社会』三元社、第 24 号、2022 年）。この文章は民族学＝人類学、シベリア学、社会言語学などの諸分野にわたり、難問にぶつかりながら自問自答を重ねる感じの

文体でつづられており、そう簡単に「分かった」と言えるものではないが、とにかくいろいろな意味で触発されるところがある。渡辺の重厚な問いを単純化してしまったり、ねじ曲げたりしてしまうおそれを意識しつつ、とりあえず印象に残ったいくつかの個所に注目してみたい。

まず、地域別で見るなら、シベリア・極東出身者（特にブリヤーチアやトゥヴァ、ザバイカーカリエといった南シベリア）が戦死者を多く出しているのは間違いないようだ。そのことは、その地域の貧困と相関している（同じシベリア・極東でも、天然資源に恵まれているため経済的に豊かなサハ=ヤクーチアやヤマル・ネネツ自治管区では戦死率が低い）。注意すべきは「地域」と「民族」は直対応していないということであり、それらの地域に住むロシア人も多数の死者を出している。つまり、戦死率の格差を民族格差（差別）と同一視することはできない、しかし、だからといって民族的次元を軽視することもできない、という微妙な問題が指摘されている。

民族的次元に即して考えようとする場合にも、公的な発言とそれに同調しない発言を分けて見ていく必要がある。公的レベルでは「北方・シベリア・極東先住少数民族協会」という団体があるが、これは「多民族国家ロシア全体の安全」という立場からプーチンの戦争を支持する声明を出した。またロシア仏教界はその指導部にブリヤート人を多く有しているが、彼らも兵士や将校の安全祈願のための読経を始めた。もちろん、他方では、そうした公的発言に抗して反戦の声を挙げるブリヤート人団体もある（但し、その声をどう読み解くかはなかなか複雑な問題をはらむようだ）。

地域と民族の区別を踏まえるなら、戦死者の〔地域別ならぬ〕民族別内訳を知ることが望ましい。その作業は容易ではないが、ある情報によれば、戦死者の 70 %はロシア人であり、次いでダゲスタン諸民族が 5 %、タタール人 3 %、カザフ人 2.9%、ブリヤート人 2.5%の順だという。7 割がロシア人という数字は「戦死は非ロシア諸民族にばかり押しつけられているのだろう」と漠然と思いついて人を驚かせるだろう。もっとも、全人口中の比率でいえばロシア人は約 8 割を占めるので、それに比べれば過小代表ということになるが、それでも圧倒的に少ないというわけではない。タタール人は全人口中で 3.8%なので、戦死者中の比率が 3 %というのはロシア人同様に過小代表ということになる。これに対し、ダゲスタン諸民族、カザフ人、ブリヤート人は明らかに過剰代表だから、やはりそれら諸民族は犠牲になりやすいということが言える。それにしても、タタール人やヤクーチア人の戦死率が相対的に低いということは、あらゆる非ロシア人が等し並みに犠牲を押しつけられているわけではないということの意味する（ついでにいえば、ロシアには 300 万近くのウクライナ人が住んでいるが、彼らが今回の戦争のなかでどういう位置におかれているのかに関する情報は極度に乏しい。ラリーエルによれば彼らは殊更に差別されたり敵視されたりしてはいないとのことだが、この辺はもっと詳しい情報を知りたいところである）。数字はともかく、もっと重要なのは人々の意識である。この点に関する正確な分析は至難だが、あるイギリスの人類学者の情報によれば、普通のブリヤート人が自分はロシア国民だと考え、ドネツクはロシアの土地だと考えている例が珍しくないという（「だって、あそこは私たちの土地でしょう」という発言が紹介されている）。それは必ずしもロシア人あるいは権力に強制されて同調しているというわけではない。イデオロギーはモスクワから直接に押しつけられるというよりも、地元のエリート（インフルエンサー）を介して広

がるものだということが指摘されている（ロシア国防大臣のショイグーがトゥヴァ人だということはよく知られているが、その彼の取り巻きの一人が例として挙げられている）。もう一つの論点として、「ロシア世界」論がある。これはロシア語を使う人々を一つの「世界」と見なす考え—— trans-ethnic nation without national boundary という興味深い表現が使われている——である。この概念が拡張主義につながりやすく、今回の侵略戦争の一つのよりどころとなっていることはしばしば指摘されているところである。それはある程度までその通りだが、そこには必ずしも直接的なイコールの関係があるわけではない。「ロシア世界」論にもいろいろな種類があり、拡張主義とのつながりは「因果性」というよりはむしろ「親和性」だという（日本でも「大東亜戦争」の理念に共鳴しつつ現実の戦争には批判的だった人がいたという例が言及されている）。この問題は更に、言語というものの二面的性格（深くアイデンティティに関わる面と便宜的道具として使われる面）その他の多くの興味深い論点につながっているが、それらに立ち入る余裕は今はない。複雑多岐にわたり、深い考察と模索を重ねている渡辺の議論を、かなり我流にまとめてみた（多くの個所を切り捨てた一方、渡辺が触れていない事項にも多少触れたりした）。的外れな整理になっている個所もあるかもしれないが、とにかくいくつもの深刻な問題を考えさせる重要な契機となったので、執筆者への敬意と深謝を記しておきたい。

（追記）。渡辺論文を読んだ後に接した最新のニュースとして、ローマ教皇がウクライナ戦争における残虐行為に関して、「ロシアの伝統に属さないロシア人、例えばチェチェン民族やブリヤート民族」が最も残忍だと発言して物議を醸したということが伝えられている。多くの戦死者を出していることと多くの兵士を出していることは表裏一体だから、本文で書いたこととこの発言はメダルの裏と表のような関係にある（そのことをどう評価するかはもちろん別問題）。もっとも、ブリヤート人の戦死者はいくら過剰代表だといっても本文で紹介した情報では 2.5%ということなので、全体に占める比重がそれほど大きいわけではない。またタタール人やヤクート人のように過小代表の民族もいるので、「ロシアの伝統に属さないロシア人」がみな同じような位置にあるわけではない。しかし、渡辺論文を唯一の例外として、このような入り組んだ関係に触れた議論は全く存在しないようだ。

20221218

昨日、社会運動論研究会という会（対面とオンライン併用）にオンラインで出席した。この会のことは私もよく知らないのだが、内容に関心を引かれたので、部外者として参加させていただいた。二冊の本を取り上げた合評会で、1冊目は、

Chelsea Szendi Schieder, *Coed Revolution: The Female Student in the Japanese New Left*, Duke University Press, 2021.

この本自体は私は読んでいなかったが、話を聞いてみると、事前に予想されるような女性運動・フェミニズム運動を対象とするのではなく、男性を多数派とする運動に女性が参加するなかで生じた摩擦や矛盾を論じた作品だとのこと。書物そのものを読んでいないため十分分かったとはいえないが、二人のコメンテーター（安藤丈将、小杉亮子の両氏）の発言はいずれも大変興味深いものだった。差別は本人の意図から生じるのではなく、当事者の文化的コードによるという指摘（男性活動家が女性活動家に料理をしてくれとお願いし

たことはないのに、女性が料理をしていた)、民間メディア(特に漫画やタブロイド新聞の役割が大きい)のポリシング機能(内容的批判ではなく、からかうことで意欲をくじく)、暴力の問題(国家への対抗暴力、内ゲバ、テロの腑分け)、いわゆる「ニューレフト」の運動における諸政治党派・全共闘・ノンセクトの相互関係等々の論点が出された。二人のコメンテーターの話を聞いているうちに、暴力および多様な参加者たちの相互関係という論点をめぐって、2014年ウクライナの「マイダン革命」の例が頭に浮かんだ。そこにおいても、既存野党指導者・一般大衆(市民)・極右団体の相互関係や、特に極右による暴力戦術が他の人々にどのように受けとめられたのかが大きな論点となっている。極右であれ極左であれ、一部の反政府運動参加者が暴力戦術に訴えるとき、それに既存野党なり一般市民なりがどのように反応するかは一義的ではなく、その交錯を追跡するのは興味深い課題となる。もちろん、これは当日の議論からは逸脱した外在的な思いつきだが、この会の議論がそういう思いつきを触発してくれたことに感謝したい。

書評対象の二点目は、猿谷弘江『六〇年安保闘争と知識人・学生・労働者——社会運動の歴史社会学』(新曜社、2021年)。コメンテーターはTobias Weiss、鈴木玲の両氏。この本については以前に長めの書評を書いて、私のホームページ上に公表したことがある。

1冊目の本の著者が日本を研究する外国人だったのに対し、2冊目の本の著者は日本人だが、日本の大学を卒業してすぐにアメリカに留学し、アメリカで社会運動論を学んで、その適用のような感じで日本の例を研究し始めたという点では「外からの眼差し」という点で共通するところがある。もっとも、単純にアメリカ(およびフランス)の理論のそのままの適用に終始するのではなく、実地の調査に着手したところ、事前に予期していたのとは違う現実につつかり、手探りの模索を進めたということが記されており、そのあたりが特に興味深いと感じた。私自身は、六〇年安保を自ら研究しているわけではないし、当時はまだ幼くてリアルな記憶があるわけではないが、比較的近い時代の出来事として、かなりの情報に接してきて、何となく「土地勘」のようなものが形成されてきた。しかし、今の若い世代にとっては、1960年というのは生まれるよりもずっと前の昔であり、ことさらに研究対象としない限り「土地勘」をもちにくいだらう。まして、アメリカの大学院で研究生生活を始めたのであれば、なおさらである。こう書くからといって、私の方が対象をよく知っているなどと主張したいわけではない。例えば1930年代のソ連を私が研究する場合、それは遠い外国の、自分が生まれるよりも前の時代のことであり、「土地勘」がない状態から出発するほかない。だから、これは善し悪しの問題ではないのだが、とにかく世代・生育環境・予備知識等の違いによってかなりパースペクティブが異なってくるということを意識して対話を交わす必要があるだろうと感じた。

全般的な感想については前掲の書評で書いたが、当日の議論の中で著者がマルクス主義的知識人をあまり取り上げなかったことの原因として、そのためには誰が共産党員かを特定しなくてはならないが、共産党員であることを当事者が秘匿しているので、対象を特定できなかったというようなことが述べていたのが気になった。ここにはいくつもの問題がある。マルクス主義者であることと共産党員であることは別の問題であり、非共産党員のマルクス主義者も多数いたし、またマルクス主義者を自認しないがマルクス主義の影響をかなり受けたという人も相当多い(代表例は丸山眞男)。何らかの職に就いている人が共産党員であることを公けにしないのはよくあることだが、知識人であるなら、その執筆した

文章およびその発表媒体から、「あの人は共産党系」と推定するのは決して難しいことではない。さらには、ある時期に共産党員に入りながら、その後に離党したり除名されたりした人も数多く、そうした人たちはいつ頃まで党内にいたということを公けにしていることもよくある。戦後初期の日本ではマルクス主義および共産党の威信が今日では想像できないほど高く、一時共産党に入ってから、あれこれの理由で離れた人は枚挙にいとまがない（類似の状況はフランスにもあったようで、ミシェル・フーコーも離党組の一人）。いわゆる「進歩的知識人」を論じる際に、こうした事例を対象から排除することは視野を極度に狭めることになる。今日の状況がこれと大きく隔たっているのはいうまでもなく、それをどう評価するかは別問題だが、とにかく当時の状況を歴史的に認識するためには、こうした側面を視野に入れておくことが不可欠だろう（当日の討論の中で松井隆志氏が共産党の役割の大きさに言及したのも、これに近い意味だろうか）。

勝手な感想を書き連ねたが、刺激的な討論だった。当日の司会にあたった組織者の樋口直人氏に謝意を表したい。

20221226

先週の土曜日（24日）、冷戦研究会で板橋拓己『分断の克服 1989-1990 ——統一をめぐる西ドイツ外交の挑戦』の合評会があった（対面とオンラインの併用で、私はオンライン参加）。著者の基調報告に続いて、岩間陽子、吉留公太両氏からのコメント、それへの著者のリプライ、総合討論と長時間にわたって充実した討論が繰り広げられた

板橋氏の基調報告は書物の内容を要約しつつ、中でも研究史・史料状況・ポーランド国境問題・NATO不拡大問題・冷戦終焉の意味といった問題を重点的に論じた。冷戦の終焉については膨大な議論があるが、板橋・吉留両氏の見方は私の考えと近いもので、相互補強的な関係にある。日本のドイツ史研究とアメリカ史研究を代表する二人の専門家からこのような観点が出されたことは、私を勇気づけてくれた。

二人のコメンテーターのうち最初に発言した岩間陽子氏はドイツ統一過程が進展した時期にベルリン自由大学に留学していたとのことで、当時のドイツの精神状況に関する同時代的感覚を披瀝してくれた。ドイツの若い人たちの間にはNATOはもう終わり、これからはC S C Eの時代だという感覚が広まっており、関連して「欧州共通の家」論への熱狂があったとか、旧東プロイセンへの郷愁はまだ非常に強かった（その後、世代交代で変わってきた）といった指摘は、なるほどと感じさせられた（板橋氏のリプライでも、ドイツ人のNATOへの態度はアンビヴァレントな——むしろ「愛憎」のうちの「憎」の要素の強い——ものだということが指摘された）。もう一つの論点として、岩間氏はゴルバチョフの外交的拙劣さということをサロツテらに依拠して強調していたが、これは結論的に当たっていなくもないとはいえ、やや性急に過ぎると感じたので、討論の中で私から補足発言を行なった。「東ドイツは最もソ連に忠実な国なのに、それを手放した」という発言もあったが、ホーネッカーはゴルバチョフへの批判的態度を隠そうとしていなかったから、とても「忠実」どころの騒ぎではなく、「手放した」というよりは、コントロール不能な状況にあるなかで模索を重ねていたと言うべきではないかと感じた。1990年3月18日の東ドイツ議会選挙後は列車はもう発車したという指摘はその通りだが、逆にいえば、3月以前には事態はまだ流動的であり、ゴルバチョフに限らずすべての関係者が不確定な状況

下で手探りの模索を行っていたということではないだろうか。

二人目のコメンテーターである吉留公太氏は著者との見解の近さを前提した上で、いくつかの個別の問題に関する疑問を提出した。7月のNATOロンドン宣言が一方的な声明という形をとったことの意味をもっと重視すべきではないかとか、ゲンシャールの3つの側面として、①西ドイツ政府の高官（ナショナリズムの担い手の一人）、②ピヴォット（かなめ）政党たる自由民主党の党首、③東西融和的なヨーロッパ秩序の提唱者を挙げ、当時の諸外国観察者は①に注目していたのではないかとか、「2プラス4」交渉においてソ連はドイツ統一と欧州統合の同期化を主張していたことをどう評価するかなどの問題が提起され、どれも重要な論点だと感じた。特にゲンシャールの3側面という指摘は私のこれまで意識していなかったもので、興味深く感じた。当時のヨーロッパの外交官たちは①の側面を当然のこととして意識していたのかもしれないが、シェワルナゼは③の側面をもつばら重視し、ゲンシャールに幻惑されていたように見える（シェワルナゼの回想は2種類あり、邦訳があるのは古くて薄い本だが、大分後に出たもっと厚い回想を読むとゲンシャールに文字通り魅せられていたという印象が生じる）。

総合討論の中で、私はかなり出しゃばっていろいろな点に触れたが、書物それ自体に即した批評としては、32-34頁あたりで1986年のソ連とゲンシャールの接触について述べた個所をとりあげてみた。大筋は板橋氏の書くとおり（この時点でゴルバチョフはコールとの関係改善を進めるつもりはなかった）だが、それを補足する側面として、ゴルバチョフはヨーロッパの強国としての西ドイツの位置に着目しており（ヨーロッパ規模で重要なだけでなく、対米関係を含めた世界規模でも重要と見なされた）、コールの冷たい態度を前提すれば直ちに関係改善に進むわけにはいかないにしても、何とかしてその状況を打開しようと考え、一方ではゲンシャールと接触し、他方では社民党の進出にも期待するという二面作戦をとっていたのではないかと思える（この仮説は板橋氏が使ったのと同じ資料集に依拠しているが、ドイツ語版とロシア語版で多少の異同があるのかもしれない）。

大小取り混ぜて多様な論点をめぐる議論が飛び交い、楽しい討論の機会だった。組織者たる石垣勝氏、司会をつとめた小川浩之氏に感謝したい。

20221230

暗い時代を生きるということ。

もう何年も前にさかのぼるが、暗い時代を生きているのだなあという感覚が強まった。具体的なきっかけはよく覚えていないが、ロシアでも、日本でも、アメリカでも、その他多くの国々でも暗い情勢が続いているような気がして、しかもそれは特定の政治家のせいというだけではなく、そうした政治家たちを生み出している社会状況（反知性主義、ポピュリズム、排外主義、そして「ぶっちゃけ本音主義」的な風潮等々）があるような気がしてきた。「ぶっちゃけ本音主義」という言葉は2016年にトランプ登場と関連して思いついたものだが、これはアメリカだけのことでなければ、このとき突然始まったものでもなく、世界の至る所で以前から高まりつつあったものがトランプという形で一つの象徴的表現を見たものであるように思われた〔フェイスブック 20161109 投稿〕。

それから数年経つうちに、2020年にはコロナ禍が到来した。これは今なお収束したとはいえない状況だが、それでも大分慣れてきたせいも、到来直後の切迫した感覚は今では忘

れられかけている。当時は、何やら得体の知れない不気味な災厄が世界全体を襲っているという感覚があり、それまで「先進国」と見なされてきた西ヨーロッパ諸国やアメリカなどでバタバタと大勢の人が死に、大病院が瀕死の患者であふれかえって手の付けようのない状態になっているという映像が見る人に衝撃を与えた。基本的な対策として外出自粛が呼びかけられ、限られた職種の人たち以外は家の外に出ない「引きこもり」を余儀なくされた。私自身は比較的「引きこもり」に慣れている方だが、それでもこれが続くのかと思うとうんざりする感覚があった。そうこうするうちに、今年になってウクライナで戦争が始まった。戦争それ自体が凄惨極まりないことはいまでもないが、遠く離れた地にいるわれわれがいくらやきもきしても戦争を止めることなどできそうにないという無力感が暗さの感覚を増幅したし、戦争に心を痛める点では共通しているはずの人たちが現状分析や提言をめぐる激しく対立し、お互いに罵り合うという状況も、気分を憂鬱にした。こういった風な世の中の動向とは別に、プライベートな方面でも——これはここに具体的に書くべきことではないが——心を暗くする問題を大分以前から抱えていて、それが長いこと持続している。加齢に伴う心身能力の衰えは、そうした暗さを倍加している。こういう風を書くに、「そのわりには元気で活躍しているではないか」といぶかしく思う人がいるかもしれない。確かに、外面的に言えば、ここ数年の間に、論文集一冊および長年の懸案だった3巻本を刊行し、それ以外にもいろんな文章をかなりたくさん書き、またあちこちで発言したりもした（特に今年はこちらでウクライナ関連の講演をすることになった）。だが、自分の主観としては、それは元気に満ちていることのあらわれではなく、むしろややもすれば心がめげてしまいかねない気分を抱えながら、だからこそ自分を鼓舞するために、精一杯の「空元気」を出しながらの仕事だと感じている（「空元気」という言葉は、ここ数年間、妻と私の会話のキーワード）。

そんなことを考えているうちに、大分以前に読んだ良知力『青きドナウの乱痴気』の「あとがき」の一節を思い出した。この文章で良知は、かつてウィーンで知り合った女性のことと触れて、彼女は「身障者で夫も子供もなく、孤独でしかも貧乏なのにいつも陽気で、明るくニコニコと振舞っていた」として、その言葉を次のように紹介している。「ウィーン子はね、苦しみや悲しみみたいなものはシュトラウスを歌いながらみんな喉の中に流し込むのよ」。（なお、良知は本書執筆時に癌との闘病生活を送っており、この文章を書いた2週間後に逝去した）。私はそれまでヨハン・シュトラウスの音楽は脳天気すぎるという気がして、あまり好きでなかったが、これを読んで、なるほどそういうこともあるのかと思い知らされた。だからといって一気にシュトラウス・ファンになったわけではないが、正月休みには、何か心を慰めてくれる音楽を聴いて、良知および彼の紹介する女性に倣って、苦しみや悲しみを喉の中にぐいと呑み込んで、暗い時代を生き抜いていくための空元気を出すことにしよう。